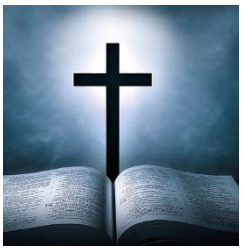
「天にある大きな喜びを想像して」（2023.9.17）

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。
独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ 3:16 ）

上掲の御言葉は、聖書全体を一文で要約するとこの文章になるという意味で、「ミニバイブル」（Mini Bible）と呼ばれます。まず「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」と告げます。「お与えになった」ということは、十字架の死に渡されたということです。しかも、ご自分の独り子です。自分の子供を惜しまない親はいないでしょう。しかし、神様はご自分の独り子を惜しむ以上に私たちを惜しまれ、独り子を死に渡されたと告げるのです。考えて見ると、独り子を死に渡すということは、御自分が死を味わうということです。砕いて言えば「あなたのためなら、私は死を味わっていい。」そういう告白です。ドイツの神学者トゥルナイゼンは著書のなかでこう表現しています。「神は、我々人間なしに存在しようと欲せられない」。つまり、「あなたなしには、私は生きていようとは思わない」ということです。私たちはなんと深い愛のメッセージを聴いていることでしょう。



ふと思います。私たちにどれほどの価値があって、神様はそれほどまでに愛されるのでしょう。それは、「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」ここにあります。私たちが永遠の命を持ち得る存在だからです。永遠の命とは、永遠なる神との愛と信頼の交わり、ということです。ただ単に死なない命ということではありません。それほど神様は、私たちが神様に信頼し、神様と共に生きることを願っていらっしゃるのです。神様に向って「アッバ」と、いついかなる時も呼び掛けたイエス様がその模範です。そのために、その交わりを妨げている罪の全てを完全に消し去るために、神様は独り子イエス様を十字架の死に渡されたのです。

このみ言葉、十字架の御業を信じる私たちは、大胆に神様の御前に進み出て礼拝できます。これこそ十戒の第一の戒め、「神を神とする」ということであり、神様が死を味わってもいいと願った私たちの姿です。ですから、私たちが礼拝を捧げている時、天では大きな、大きな喜びが沸き起こっているのです。礼拝参加者の多い少ないは関係ありません。そして、私たちが独り聖書を読み、賛美し、祈る時も、神様は大いなる喜びをもって私たちをご覧になっているのです！

想像力をたくましくして、大いに喜ぶ神に思いを馳せ、神を喜びましょう。

「主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」(ネヘミヤ 8:10)